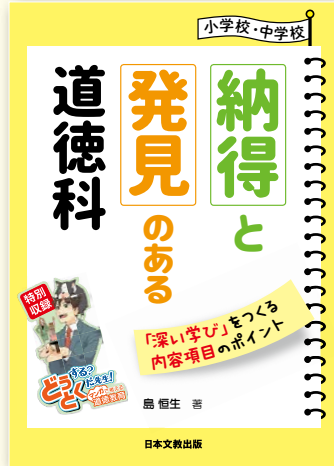


新刊本のご案内

2020年3月下旬発売予定



小学校・中学校

納得と発見のある道徳科

「深い学び」をつくる内容項目のポイント

本資料『内容項目ハンドブック』の内容を発展させ、小学校・低学年から中学校までの発達段階に沿って「全内容項目のポイント」を解説し、「氷山の三層モデル」を使って授業のねらいと発問を具体的に提案しています。道徳科の課題を克服し、子どもたちにとって「納得」と「発見」のある授業を作っていきましょう！

島 恒生 著
定価 1,800円＋税
B5判 216ページ

発売中

道徳にチャレンジ



学校の教育活動全体を通して行う道徳教育やその要となる道徳科の目標や内容、指導計画・指導方法をキャラクターがガイド。演習を通して実践的な指導力が身につきます。

石黒 真愁子 著
定価 1,800円＋税
B5判 160ページ

考え議論する

新しい道徳科実践事例集



児童生徒が自ら道徳性を育むために、答えが一つではない課題に真剣に向き合い、考え、議論する道徳科への転換を図ることをめざした、意欲的な実践を紹介します。

鈴木 明雄
江川 登 編著
定価 1,800円＋税
B5判 240ページ

道徳科 「深い学び」のための 内容項目ハンドブック

日文 教授用資料

令和2年（2020年）2月28日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL: 06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD 33493

日本文教出版 株式会社

<https://www.nichibun-g.co.jp/>

大 阪 本 社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171
東 京 本 社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618
九 州 支 社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938
東 海 支 社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18・F・B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261
北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690

道徳科

「深い学び」のための

内容項目ハンドブック

畿央大学大学院教授 島 恒生

本資料は、一般社団法人教科書協会
「教科書発行者行動規範」に則り、
配布を許可されているものです。

日文の実践事例、教科情報

詳しくはWebへ！

日文

検索



未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

深い学びのために―道徳の内容の理解―	2
内容項目のポイント	3
「特別の教科 道徳」内容項目一覧と本書のキーワード	6
A 小 善悪の判断，自律，自由と責任／中 自主，自律，自由と責任	8
A 小 正直，誠実／中 自主，自律，自由と責任	9
A 小／中 節度，節制	10
A 小 個性の伸長／中 向上心，個性の伸長	11
A 小 希望と勇気，努力と強い意志／中 希望と勇気，克己と強い意志	12
A 小 真理の探究／中 真理の探究，創造	13
B 小 親切，思いやり／中 思いやり，感謝	14
B 小 感謝／中 思いやり，感謝	15
B 小／中 礼儀	16
B 小／中 友情，信頼	17
B 小／中 相互理解，寛容	18
コラム「深い学び」の現場から	19
C 小 規則の尊重／中 遵法精神，公德心	20
C 小／中 公正，公平，社会正義	21
C 小 勤労，公共の精神／中 勤労	22
C 中 社会参画，公共の精神	23
C 小／中 家族愛，家庭生活の充実	24
C 小／中 よりよい学校生活，集団生活の充実	25
C 小 伝統と文化の尊重，国や郷土を愛する態度 ／中 郷土の伝統と文化の尊重，郷土を愛する態度	26
C 中 我が国の伝統と文化の尊重，国を愛する態度	27
C 小 国際理解，国際親善／中 国際理解，国際貢献	28
D 小／中 生命の尊さ	29
D 小／中 自然愛護	30
D 小／中 感動，畏敬の念	31
D 小／中 よりよく生きる喜び	32

※本文中の「学習指導要領」は、「小学校学習指導要領」（平成29年告示）および「中学校学習指導要領」（平成29年告示）を指します。

※本文中の「学習指導要領解説」は、『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』および『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』（いずれも文部科学省）を指します。

※「学習指導要領」「学習指導要領解説」での小学校の「第1学年及び第2学年」「第3学年及び第4学年」「第5学年及び第6学年」は、本文中ではそれぞれ「低学年」「中学年」「高学年」と表記します。

子どもたちにも教師にも、魅力的な道徳科の授業を

「特別の教科 道徳」（以下、道徳科）がスタートして数年が過ぎようとしています。子どもたちにとって、教師にとって、魅力的な道徳科の授業が実現していますか。

子どもたちにとって魅力的であるということは、教師にとっても魅力的で楽しい授業です。どうすれば、この魅力的な授業ができるのでしょうか。それは、「主体的・対話的で深い学び」のある授業に質的転換を図るのです。子どもたちが自分事として考え、友達をはじめ他者との対話を通して、深い学びを得ることのできる授業です。そのような授業を、道徳科では、「考え、議論する道徳」と呼んでいます。

では、「深い学び」とは何でしょう。それは、道徳科の目標である、「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え、自己の生き方（人間としての生き方）についての考えを深める」（カッコ内は中学校の内容）という学びです。

道徳の教科化に当たっての課題の一つである「分かり切ったことを言わせたり書かせたりする授業」に関しては、「親切にすることが大切だ」などと、行いや行動レベルの分かり切った授業になりがちでした。

さらに、「親切は、された方だけでなく、した方も、そして周りの人たちの心もポカポカと温かくしてくれる。だから、とても素敵なことなんだ」といった内容は、小学校の低学年で考え合いたいことです。ところが、中学校の授業がこの内容に終始すれば、当然、「分かり切ったことを言わせたり書かせたりする授業」になってしまいます。つまり、発達の段階が考えられていない、まさに「深い学び」とならない授業となるのです。

つまり、道徳科で「深い学び」を得る授業を構想するためには、教師の側に、学年の発達の段階ごとの道徳の内容の理解が欠かせないのです。

個々の内容項目については、「学習指導要領解説」に詳しく示されています。しかし、それを読んだだけでは、なかなか理解することが難しいものもあります。また、道徳科の授業のねらいは、小学校の低、中、高学年、中学校の発達の段階によって当然違います。本資料では、授業構想や道徳の内容の理解に役立つように、この発達の段階による違いを内容項目ごとに解説しています。

個々の内容項目の解説に当たって

本資料で解説する内容は、主として、小学校、中学校の「学習指導要領解説」を基に、これまで筆者自身が参観してきた授業や研究協議の経験から書いています。当然、「これではいけない」といったものではないことと、特に、道徳の内容の解釈は、多様な見方が大切であることに、くれぐれも留意してください。

小学校と中学校との違い

まず、道徳科の目標から、小学校と中学校には違いがあります。例えば、小学校は「自己の生き方についての考えを深める」ですが、中学校は「人間としての生き方についての考えを深める」となっています。小学校は、自分のこととして捉え、これからの自分自身の生き方について考えるというところですが、中学校は、それを踏まえた上で、人間としての自己の生き方という視点が大切です。

では、「人間として」とは、どういうことでしょうか。私たち「人間」は、弱さと強さの両方をもった存在です。分かっている、なかなかできないものです。それは、弱さに負けてしまうことがあるからです。実際、中学生も、「何が正しいか」は知っています。そして同時に、「正しいことを実現する難しさ」も知っています。そのことを分かった上で、道徳的価値の大切さについて考えていくことになります。

では、私たち人間は、正しいことができないかという、それを実現しようとする「強さ」もあるのです。その中身が、「自分の誇り」「プライド」「良心」「逃げたくない自分」などではないでしょうか。

中学生も、よりよい生き方を実現しようとする人に対して、憧れや尊敬の念を抱きます。また、純粋であるが故に、自らの誇りをかけて自分も実現しようとする努力します。しかし、そう簡単にできるものではないため、弱さと強さの葛藤にさいなまれ、自信をなくしてしまったり、自分を肯定できなかったりすることもあるのです。

ここに、中学校の道徳科のポイントがあるでしょう。まずは、教材の登場人物を通して、人間としての弱さに教師も含めてみんなで共感するのです。「自分だったらどうだろうか」「あなたたちならどうする」という投げ掛けを「さりげなく」するのです。そうすることで、教材を自分事として考えることができます。そして、正しい行いや行動をした登場人物を支えているものや後押しているものといった視点で、みんなで考え合うのです。このとき、あくまでも教材の登場人物を通してあるので、中学生にとっては考えやすくなります。教材を使うことの効果です。そして最終的には、自分の中にも、正しい行いや行動へと向かう「自分の誇り」「プライド」「良心」「逃げたくない心」といったものがあることを、一人ひとりが自覚できるようにするのです。

なお、小学校は、「自己の生き方についての考えを深め」ます。それは、自分の生き方を、多様な視点で考えられるようにすることです。つまり、様々な感じ方や考え方、生き方についての自覚を深めるようにすることです。

小学校の低、中、高学年の違い

さらに、小学校では、低学年と中学年、高学年の違いも重要です。

例えば、低学年の子どもたちは、結果や具体の世界に生きています。中学年の子どもたちは、少しずつ抽象的な考え方ができるようになり、動機を大切に考えられるようになります。さらに、高学年の子どもたちは、自分を第三者的に俯瞰できるようになってきます。

したがって、低学年の子どもに対しては、結果に注目させましょう。頑張った結果、親切にした結果、仲よくした結果、きまりを守った結果、「うれしかった」「いっぱいできるようになった」「自分が大きくなった」「やればできと思った」「つらかった」「悲しかった」「モヤモヤした」などです。

一方、中学年の子どもには、動機のもつ意味です。「○○といった思いや願いがあったから」という理由を大切にしましょう。それが、正しいことをすることの理由です。しなければ、その思いや願いは消えてなくなってしまうのです。

さらに、高学年の子どもたちには、動機に一步踏み込み、正しいことをすることの理由や意義を、さらに広げて押さえることです。特に、自分を第三者的に俯瞰したり、置かれている状況を広い視野で捉えたりできる高学年です。正しいことをすることの意味や考え方を、より広く、深く考えることができるようにしましょう。

なお、これらは、子どもたちの発達の段階に即したものです。道徳科がスタートするに当たって、「学習指導要領解説」では道徳の内容の解説の示し方が変わりました。これまでは、低学年、中学年、高学年別に示されていたものが、内容項目ごとに、同じページの中で低学年、中学年、高学年が示され、中学校の内容も補記されました。一度に、発達の違いを俯瞰できるようになったのです。

授業の構想に当たっても、この発達の段階の違いを十分に生かし、ねらいも具体的にしながら進めていきましょう。

4つの視点の違い

道徳の内容は、平成元年の「学習指導要領」の改訂以降、4つの視点で整理されています。道徳の内容を考える際、この4つの視点のそれぞれのまとまりの特徴がとても参考になります。それは、次のようなものです。

Aの視点……自分との闘い。

Bの視点……相手のことを最大限に大切に。

Cの視点……集団の中に自分もいる。自分も仲間の一人。

Dの視点……ちっぽけだけど、とてつもなく重く、大きなもの。

【Aの視点】まず、Aの視点は、「主として自分自身に関すること」です。この内容は、概して、自分との闘いです。私たちはつい、自分の中にある弱さに負けてしまいがちです。でも、自分の中には、正しいことをしようとする心、自分のよさ、これではだめだという気持ちなどがきちんとあるのです。それを信じ、自分の弱さに打ち克つこと。そして、打ち克ったとき、心の中に、喜びや自分に対する自信をもち、成長して大きくなった自分を意識することができるのです。

【Bの視点】続いて、Bの視点は、「主として人との関わりに関すること」です。私たちには、相手のことを考え、相手のために自分ができることをしようとする思いがあります。ところが、それを阻むのが、「自分」です。「自分のことを分かってほしい」「認めてほしい」「感謝してほしい」といった思いが、ムクムクと湧き起こってくるのです。しかし、自分には、相手のためにできることを懸命に考えていたはずで、相手のために自分を犠牲にするのではないのです。素直に、ひたすら相手のためを思っていたのです。さらに、相手は自分にはないよさをたくさんもっています。相手から素直に学ぶことも大切です。これらのことを再認識し、相手に対して自分が今なすべきことを考えるのです。

【Cの視点】Cの視点は、「主として集団や社会との関わりに関すること」です。私たちは、決して、一人で生きていくことはできません。必ず、何らかの集団や社会の中で生きています。しかし、私たちはそれを忘れ、自分一人で生きているように思ってしまう。集団や社会の中で生きているということは、自分もまた、それを構成するメンバーの一人である、すなわち、自分も仲間の一人ということです。そうすると、誰かがすればよいと思っていることは、当然、自分自身にも向けられます。「誰か」の中に、自分がいるのです。集団や社会の向上の責任は、自分も担っているのです。

【Dの視点】最後に、Dの視点は、「主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」です。生命、自然、美しさ、人間は、とても小さく、弱いものです。しかし同時に、それらは、とてつもない大きさ、強さ、重さ、広さ、深さをもっているのです。このことを謙虚に受け止め、その大きさ、強さ、重さ、広さ、深さの内実を考えることが、それらを尊重する心へとつながっていくのです。

道徳の内容をしっかりとつかもう

では、それぞれの道徳の内容を見ていきましょう。以下のページでは、内容項目ごとに「発達の段階ごとのキーワードとポイント」を述べています。授業構想、ねらいや教材の分析などに生かしていただけるものと思います。なお、キーワードは、授業において子どもたちの発言の中から学びを深める意見を見つけ、立ち止まるための指標にもなります。

「特別の教科 道徳」内容項目一覧と本書のキーワード

小・内容項目	小・低学年（19項目）		小・中学年（20項目）	
	内容項目	本書のキーワード	内容項目	本書のキーワード
A 主として自分自身に関すること 「自分との関い」				
善悪の判断，自律，自由と責任	よいことと悪いこととの区別をし，よいと思うことを進んで行うこと。	「よいことと悪いこと」「喜び」	正しいと判断したことは，自信をもって行うこと。	「やればできる」「自信」
正直，誠実	うそをついたりごまかしをしたりしないで，素直に伸び伸びと生活すること。	「モヤモヤとすっきり」	過ちは素直に改め，正直に明るい心で生活すること。	「自分を偽らない」「自分に正直」
節度，節制	健康や安全に気を付け，物や金銭を大切にし，身の回りを整え，わがままをしないで，規則正しい生活をするこ	「よい生活習慣の気持ちよさ」	自分でできることは自分でやり，安全に気を付け，よく考えて行動し，節度のある生活をするこ	「自分でしっかり考える」
個性の伸長	自分の特徴に気付くこと。	「自分のよいところ」	自分の特徴に気付き，長所を伸ばすこと。	「よさは伸びる」
希望と勇氣，努力と強い意志	自分のやるべき勉強や仕事をしっかりと行うこと。	「頑張った喜び」	自分でやろうと決めた目標に向かって，強い意志をもち，粘り強くやり抜くこと。	「もっとよくなりたい」
真理の探究				
B 主として人との関わりに関すること 「相手のことを最大限に大切に」				
親切，思いやり	身近にいる人に温かい心で接し，親切にすること。	「温かさ」「相手のこと」	相手のことを思いやり，進んで親切にすること。	「相手の気持ち」
感謝	家族など日頃世話になっている人々に感謝すること。	「ありがとうがいっぱい」	家族など生活を支えてくれている人々や現在の生活を築いてくれた高齢者に，尊敬と感謝の気持ちをもって接すること。	「ここまで私たちのことを」
礼儀	気持ちのよい挨拶，言葉遣い，動作などに心掛けて，明るく接すること。	「あいさつパワー」	礼儀の大切さを知り，誰に対しても真心をもって接すること。	「心を届ける」
友情，信頼	友達と仲よくし，助け合うこと。	「仲よしいいいな」	友達と互いに理解し，信頼し，助け合うこと。	「双方向の信頼」
相互理解，寛容			自分の考えや意見を相手に伝えるときにも，相手のことを理解し，自分と異なる意見も大切にすること。	「自分と相手は違う考え」
C 主として集団や社会との関わりに関すること 「集団の中に自分もいる。自分も仲間の一人」				
規則の尊重	約束やきまりを守り，みんなが使う物を大切にすること。	「みんながよい気持ち，みんながいやな気持ち」	約束や社会のきまりの意義を理解し，それらを守るこ	「みんな同じ思いや願いがあるから」
公正，公平，社会正義	自分の好き嫌いとらわれないで接すること。	「仲間はずれがないと，みんな楽しい」	誰に対しても分け隔てをせず，公正，公平な態度で接すること。	「みんな，仲間」
勤労，公共の精神	働くことのよさを知り，みんなのために働くこ	「働くことの喜び」	働くことの大切さを知り，進んでみんなのために働くこ	「みんなの役に」
家族愛，家庭生活の充実	父母，祖父母を敬愛し，進んで家の手伝いなどをして，家族の役に立つこ	「家族の役に立つ喜び」	父母，祖父母を敬愛し，家族みんなで協力し合って楽しい家庭をつくるこ	「家族の一人として」
よりよい学校生活，集団生活の充実	先生を敬愛し，学校の人々に親しんで，学級や学校の生活を楽しくすること。	「学校は楽しい」	先生や学校の人々を敬愛し，みんなで協力し合って楽しい学級や学校をつくるこ	「自分たちの学級」
伝統と文化の尊重，国や郷土を愛する態度	我が国や郷土の文化と生活に親しみ，愛着をもつこ	「私たちの自慢」	我が国や郷土の伝統と文化を大切にし，国や郷土を愛する心をもつこ	「自分たちの地域」
国際理解，国際親善	他国の人々や文化に親しむこ	「他国と接する楽しさや親しみ」	他国の人々や文化に親しみ，関心をもつこ	「文化の違い」
D 主として生命や自然，崇高なものとの関わりに関すること 「ちっぽけだけど，とてつもなく重く，大きなもの」				
生命の尊さ	生きることのすばらしさを知り，生命を大切にすること。	「生きているから」	生命の尊さを知り，生命あるものを大切にすること。	「一つしかない命，支えられている命」
自然愛護	身近な自然に親しみ，動植物に優しい心で接すること。	「動植物と仲よし」	自然のすばらしさや不思議さを感じ取り，自然や動植物を大切にすること。	「自然のもつ力」
感動，畏敬の念	美しいものに触れ，すがすがしい心をもつこ	「目の前に広がる美しさやすごさ」	美しいものや気高いものに感動する心をもつこ	「心で感じる美しさやすごさ」
よりよく生きる喜び				

「小学校学習指導要領」「中学校学習指導要領」（平成29年告示）

小・高学年（22項目）		中学校（22項目）		中・内容項目
内容項目	本書のキーワード	内容項目	本書のキーワード	
A 主として自分自身に関すること 「自分との関い」				
自由を大切にし、自律的に判断し、責任のある行動をすること。	「自由と責任」	自律の精神を重んじ、自主的に考え、判断し、誠実に実行してその結果に責任をもつこと。	「逃げない心」「誇り」「誇りから生まれる誠実さ」	自主、自律、自由と責任
誠実に、明るい心で生活すること。	「自分に対する誠実さ」			
安全に気を付けることや、生活習慣の大切さについて理解し、自分の生活を見直し、節度を守り節制に心掛けること。	「自分を見つめる」	望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、節度を守り節制に心掛け、安全で調和のある生活をするこ	「ほどよさを自分でコントロール」	節度、節制
自分の特徴を知って、短所を改め長所を伸ばすこと。	「自分磨き」	自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求すること。	「未来の自分を輝かせるのも自分」	向上心、個性の伸長
より高い目標を立て、希望と勇気を持ち、困難があってもくじけずに努力して物事をやり抜くこと。	「目標に向かって確かな一歩」	より高い目標を設定し、その達成を目指し、希望と勇気を持ち、困難や失敗を乗り越えて着実にやり遂げるこ	「自分の弱さに打ち克つ」	希望と勇気、克己と強い意志
真理を大切にし、物事を探究しようとする心をもつこと。	「分からないことをそのままにしない」	真実を大切にし、真理を探究して新しいものを生み出そうと努めること。	「真理の探究が人生を豊かに」	真理の探究
B 主として人との関わりに関すること 「相手のことを最大限に大切に」				
誰に対しても思いやりの心をもち、相手の立場に立って親切にすること。	「相手の立場」	思いやりの心をもって人と接するとともに、家族などの支えや多くの人の善意により日々の生活や現在の自分があることに感謝し、進んでそれに応え、人間愛の精神を深めること。	「さりげなさ」「見ようとしな自分の弱さ」	思いやり、感謝
日々の生活が家族や過去からの多くの人の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それに応えること。	「つながりに守られて」			
時と場をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接すること。	「心と形」	礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとること。	「T P Oと自分の心」	礼儀
友達と互いに信頼し、学び合って友情を深め、異性についても理解しながら、人間関係を築いていくこと。	「磨き合い、高め合い」	友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合うとともに、異性についての理解を深め、悩みや葛藤も経験しながら人間関係を深めていくこ	「互いのプライドの尊重」	友情、信頼
自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、謙虚な心を持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を尊重すること。	「違いは豊かさ」	自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解し、寛容の心をもって謙虚に他に学び、自らを高めていくこ	「頑なな自分と開く自分」	相互理解、寛容
C 主として集団や社会との関わりに関すること 「集団の中に自分もいる。自分も仲間の一人」				
法やきまりの意義を理解した上で進んでそれらを守り、自他の権利を大切にし、義務を果たすこと。	「権利があるから義務がある」	法やきまりの意義を理解し、それらを進んで守るとともに、そのよりよい在り方について考え、自他の権利を大切にし、義務を果たして、規律ある安定した社会の実現に努めること。	「法やきまりは自分たちが作ったもの」	遵法精神、公德心
誰に対しても差別をすることや偏見をもつことなく、公正、公平な態度で接し、正義の実現に努めること。	「仲間の問題は、自分たちの問題」	正義と公正さを重んじ、誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努めること。	「閉じた正義と開かれた正義」	公正、公平、社会正義
働くことや社会に奉仕することの充実感を味わうとともに、その意義を理解し、公共のために役に立つことをすること。	「社会の役に」	社会参画の意識と社会連帯の自覚を高め、公共の精神をもってよりよい社会の実現に努めること。 勤労の尊さや意義を理解し、将来の生き方について考えを深め、勤労を通じて社会に貢献すること。	「集団や社会の主人公」「自分が社会の力にという喜びと誇り」	社会参画、公共の精神 勤労
父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをすること。	「家族それぞれの立場から思いを考えて」	父母、祖父母を敬愛し、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築くこ	「家庭生活を築く主体として」	家族愛、家庭生活の充実
先生や学校の人々を敬愛し、みんなで協力し合ってよりよい学級や学校をつくることに、様々な集団の中での自分の役割を自覚して集団生活の充実に努めること。	「自分たちの集団や学校らしさ」	教師や学校の人々を敬愛し、学級や学校の一員としての自覚をもち、協力し合ってよりよい校風をつくることに、様々な集団の意義や集団の中での自分の役割と責任を自覚して集団生活の充実に努めること。	「校風や集団の誇りをつくる」	よりよい学校生活、集団生活の充実
我が国や郷土の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、国や郷土を愛する心をもつこと。	「伝統や文化にある先人の思い」	郷土の伝統と文化を大切にし、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬の念を深め、地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、進んで郷土の発展に努めること。	「地域社会の形成者」	郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度
		優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献するとともに、日本人としての自覚をもって国を愛し、国家及び社会の形成者として、その発展に努めるこ	「我が国の形成者」	我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度
他国の人々や文化について理解し、日本人としての自覚をもって国際親善に努めること。	「国際親善は自分から」	世界の中の日本人としての自覚をもち、他国を尊重し、国際的視野に立って、世界の平和と人類の発展に寄与すること。	「同じ人間として自分にできること」	国際理解、国際貢献
D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること 「ちっぽけだけど、とてつもなく重く、大きなもの」				
生命が多くの生命のつながりの中にあるかけがえのないものであることを理解し、生命を尊重すること。	「つながりの中にある重さ」	生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること。	「広く、深いつながり」	生命の尊さ
自然の偉大さを知り、自然環境を大切にすること。	「自然と共に生きる」	自然の崇高さを知り、自然環境を大切にすることの意義を理解し、進んで自然の愛護に努めること。	「自然に生かされている人間」	自然愛護
美しいものや気高いものに感動する心や人間の力を越えたものに対する畏敬の念をもつこと。	「人間の力を越えたものの美しさやすごさ」	美しいものや気高いものに感動する心を持ち、人間の力を越えたものに対する畏敬の念を深めること。	「感動は人を成長させる」	感動、畏敬の念
よりよく生きようとする人間の強さや気高さを理解し、人間として生きる喜びを感じるこ	「自分の中にある弱さとそれを乗り越える強さ」	人間には自らの弱さや醜さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを理解し、人間として生きることに喜びを見いだすこ	「弱さを強さに」	よりよく生きる喜び

学年	「学習指導要領」の内容	発達の段階ごとのキーワードとポイント
小・低学年	よいことと悪いこととの区別をし、よいと思うことを進んで行うこと。	「よいことと悪いこと」「喜び」 低学年には、2つの指導のポイントがあります。 まず一つは、「<u>よいことと悪いことの判断</u>」ができることです。その判断理由には、「お母さんに心配をかける」といった他律的な理由もあってよいのです。できるだけ多くの理由が出てくるのが大切です。だから、「しっかりと考える」ことが大切になるのです。 もう一つは、こうして判断したことを実行したら、「やってよかった」という喜びや爽やかさが待っていることを自覚できるようにすることです。実行した喜びの中には、「お母さんにほめられる」というものもあるでしょう。そこに、「自分で決めたことだから」という理由が考えられるようになるといいですね。
小・中学年	正しいと判断したことは、自信をもって行うこと。	(低学年の内容) + 「やればできる」「自信」 中学年になると、「自分が」そのように決めたという意識をもつことがますますできるようになってきます。そのことを、「自分もやればできる」「自信」といった意識につないでいきましょう。 それが、自分の弱い心に打ち克ったことの自覚につながるのです。特に、中学年は、正しいことをしようとする心とそれを邪魔する弱い心との綱引きのようなイメージで、自分の心の中を捉えられるようにするとよいでしょう。そして、<u>弱い心に打ち克った自分を自分でほめられるように</u>にしましょう。
小・高学年	自由を大切にし、自律的に判断し、責任のある行動をすること。	(低, 中学年の内容) + 「自由と責任」 <u>「自由」と「わがまま勝手」や「自分勝手」との違いに気付けること</u>が、高学年のポイントです。 自分の自由ばかり主張すると、他人の自由を侵害し、やがては自分の自由もなくなるといった考え方も出てくるでしょう。ただ、これだけだと、BやCの視点となります。Aの視点での学習を意識しましょう。「自分のわがままに振り回されず、しっかりと考えること」「自分が決めたからこそ、その責任は自分にあるのだから、その思いをもって判断する」といった、「<u>自分</u>」の意思で決めるところに、<u>自主・自律や自由の意味がある</u>のです。
中学校	(自主, 自律, 自由と責任) 自律の精神を重んじ、自主的に考え、判断し、誠実に実行してその結果に責任をもつこと。	(小学校の内容) + 「逃げない心」「誇り」 中学生になると、抽象的な概念を理解できるようになります。そこで、ぜひとも考えさせたいのが、「誇り」「プライド」です。 中学生の時期は、「社会性」と呼ばれるなど、友達のことが気になります。そんな生徒に、自分が正しいと信じることを自信をもって実行するものを支えているのは、自らの「逃げない心」や「誇り」「プライド」であること、それがあから、他から振り回されたり、流されたりすることなく、自分で判断し、「責任」がもてることの自覚を深めましょう。 そして、自分は何に基づいて判断しているのかを意識しながら、自律的にどんな小さなことでも自分で考え、自信をもって判断し、行動できる、「人間としての誇り」をみんなで考え合いましょう。

学年	「学習指導要領」の内容	発達の段階ごとのキーワードとポイント
小・低学年	うそをついたりごまかしをしたりしないで、素直に伸び伸びと生活すること。	「モヤモヤとすっきり」 動機よりも結果に関心が向きやすい低学年です。嘘をついたりごまかしをしたりしていると、心の中がモヤモヤとし、暗い気持ちで過ごすことになります。 一方、正直であると、心がすっきりし、ご飯もおいしく、毎日を明るく伸び伸びと過ごすことができます。 「叱られるから」あるいは「ほめられるから」正直であることが大切なだけでなく、<u>モヤモヤが消え、すっきりとした気持ちで過ごせることも、正直であることのよさ</u>なのです。
小・中学年	過ちは素直に改め、正直に明るい心で生活すること。	(低学年の内容) + 「自分を偽らない」「自分に正直」 中学年のポイントは、「自分」に対する正直さです。それは、他者に注目するだけでなく、自分の心の中に注目する考え方へと広げ、深めるものです。 ただし、まだ具体的な思考の残る子どもたちです。自分の心の中にある「正直でいよう」という強い心と「逃げたい、ごまかそう」という弱い心との綱引きで考えると、子どもたちにとっては、理解がしやすくなります。板書に絵で示すのもよいことです。 また、そうすることで、自分の中には、正直な心がきちんとあることも確認することができます。
小・高学年	誠実に、明るい心で生活すること。	(低, 中学年の内容) + 「自分に対する誠実さ」 高学年です。強い心と弱い心の綱引きで留まるのではなく、<u>弱い心に負けてしまう自分という人間の値打ちや、自分はどのような生き方をするのかという視点で考えられるように</u>にしましょう。 自分という人間を、俯瞰的に見る三人称の見方ができるようになる高学年だからこそその視点です。
中学校	(自主, 自律, 自由と責任) 自律の精神を重んじ、自主的に考え、判断し、誠実に実行してその結果に責任をもつこと。	(小学校の内容) + 「誇りから生まれる誠実さ」 何が正しいかは分かっている中学生です。しかし、そのことを誠実に実行するとなると、周りからの視線が気になります。「友達はどうするのか」「友達からどう見られるか」が気になり、ごまかししたり、流されたりしてしまいがちです。 そんな自分を客観的に見つめ、「自分が正しいと信じることを、自分は自信をもってやっているだろうか、自分は情けない人間になってはいないだろうか」と、自らの「誇り」「プライド」に問いながら判断するという誠実さを考え合いましょう。 自らの誇りにかけた判断によって、他者がどうであろうと、周りがどうであろうと、自分が正しいと信じることを動ぜずに実行することができます。自分で考え、自信をもって判断し、行動できる、「人間としての誇り」をみんなで考え合いましょう。

学年	「学習指導要領」の内容	発達の段階ごとのキーワードとポイント
小・低学年	健康や安全に気を付け、物や金銭を大切にし、身の回りを整え、わがままをしないで、規則正しい生活をする事。	「よい生活習慣の気持ちよさ」 低学年ですから、物事を行った後の気持ちを考えさせましょう。最初の段階では、ほめられた喜びも含めた気持ちのよさです。このことが自覚できるようになれば、ほめられただけでなく、頑張った自分、やればできる自分、前より大きくなった自分といった気持ちのよさを自覚できるようにしましょう。 逆に、わがままをしたり、健康や安全に気を付けることができなかったりしたときのいやな気持ちに気付くことも大切です。特に、自分も、そして周りの人たちも、いやな気持ちになるのです。
小・中学年	自分でできることは自分でやり、安全に気を付け、よく考えて行動し、節度のある生活をする事。	(低学年の内容) + 「自分でしっかり考える」 私たちは、つい誘惑に負けたり、周りに流されたりして、軽はずみな行動をし、正しいことができないときがあります。 そうならないようにするためには、行動する前に安全な生活や望ましい行動を思い出しながら、これでよいのかなどと、 <u>先のことや置かれている状況を自分でしっかりと考え、自分で、自分のハンドルやアクセル、ブレーキを操り、行動することの大切さを自覚できるようにしましょう。</u> できたときの喜びも、ほめられたり、安全な生活ができたりした喜びだけでなく、自分でちゃんと考え、自分で行動できたという喜びがあることを自覚できるようにしましょう。
小・高学年	安全に気を付けることや、生活習慣の大切さについて理解し、自分の生活を見直し、節度を守り節制に心掛けること。	(低、中学年の内容) + 「自分を見つめる」 高学年になると、自分を客観的に見るできるようになります。そうすると、誘惑や不注意、無計画さなどのある自分が見えてきます。一方で、それに打ち克ち、ほどよさを続けている自分も見えてきます。 自分の弱さに負けてしまっている自分、逆に、やればできる自分、乗り越えた自分、心掛けている自分などと自分を客観的に見つめ、 <u>「自分との闘い」に負けない自分を自覚できるようにしましょう。</u> また、自分の生活や安全など、自分のことだけにしか配慮できないのではなく、周りのことも考えられる視点や視野をもてるようにしましょう。
中学校	望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、節度を守り節制に心掛け、安全で調和のある生活をする事。	(小学校の内容) + 「ほどよさを自分でコントロール」 自分の欲望や衝動に負けず、度を越さない、ほどよさを保つ、安全に配慮するなど、心身の健康の増進、生涯にわたって学ぼうとする意欲や習慣、時間や物を大切にすること、安全への配慮、望ましい生活習慣を身に付けることなどが、他に振り回されない、充実した人生につながることを自覚できるようにします。 特に、「ほどよさ」とは、過ぎてもいけないし足りなくてもいけないほどほどのところであり、その「ほどよさ」をずっと維持することは、一見、簡単そうに見えて実はとても難しいことであること、そして、それを貫き自分自身をコントロールすることで、一回り成長した自立した自分を確立できることなどを話し合ひましょう。

学年	「学習指導要領」の内容	発達の段階ごとのキーワードとポイント
小・低学年	自分の特徴に気付くこと。	「自分のよいところ」 自分のよさは、なかなか気付くことが難しいものです。低学年ですから、自分から他人と比べてというよりも、周りの人たちからほめられたり、指摘されたりして気付くことのほうが多くあります。 そこで、ほめられたり励まされたりするところが自分のよいところであることや、よいところを知ることはいやらしい楽しいことに気付き、自分のよいところをもっと見つけようとする意欲を高めることができるようにしましょう。
小・中学年	自分の特徴に気付く、長所を伸ばすこと。	(低学年の内容) + 「よさは伸びる」 集団での活動が活発になるにつれ、子どもたちは、周りの友達と自分を比べることが増えてきます。このことは、「自分らしさや自分のよいところなんてない」などと、マイナス思考で固定的に考えてしまうことになりがちです。 私たち一人ひとりには、必ず自分らしさや自分のよさがあること、そのよさは自分の中に隠れているが、自分の力で伸ばすことができることなどと、 <u>自分のよさを固定的に捉えることなく、可能性をもってプラス思考で捉えることができるようにしましょう。</u>
小・高学年	自分の特徴を知って、短所を改め長所を伸ばすこと。	(低、中学年の内容) + 「自分磨き」 中学年では、よさは伸ばせることを学んできました。高学年では、それをさらに磨くことで、新しい自分が生まれてくることや、自分が短所と思っていることでも、他の人から見たり、見方を豊かにしたりすれば長所にもなることなど、より一層、自分磨きの大切さについて考えられるようにしましょう。 自分のよさは、自分が積極的に磨いていかないと輝いてきません。 <u>自分が磨き始めると、自分が思っていた以上に輝き始めるのです。</u> 自分を見つめ直し、自分のよさを生かすことが大切です。
中学校	自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求すること。	(小学校の内容) + 「未来の自分を輝かせるのも自分」 誰もが、よいところといやなところをもっています。そしてそれは、決して、他人と比べるものではない、その人らしさなのです。 <u>個性を伸ばすためには、まずは、この丸ごとの自分を受け入れるところが出発点です。</u> よいところもいやなところも含め、自分は自分なのです。それを、他人と比べてひがんだり、落ち込んだりしては、自分を伸ばすことには決してつながらないのです。何より、 <u>自分の値打ちを最も分からねばならないのは自分なのです。</u> その上で、よいところは自分から磨きを掛け、いやなところは改めようと自らが思うことが、その人を輝かせることになります。 人と比べてしまう弱さに気付き、過去ではなく、 <u>未来の自分を変えようとする向上心が、充実した生き方につながっていくことを</u> 自覚できるようにしましょう。 未来の自分を輝かせるかどうかは、自分次第なのです。

学年	「学習指導要領」の内容	発達の段階ごとのキーワードとポイント
小・低学年	自分のやるべき勉強や仕事をしっかりと行うこと。	「頑張った喜び」 低学年は「自分のやるべきこと」です。それは、勉強や家のお手伝い、学級の仕事などです。自分がやらねばならないことですから、最後まで、頑張ってやらなければなりません。<u>つらくても、しんどくても、頑張った先には、やってよかったという喜びが待っている</u>のです。その喜びに出会うために、辛くてもしっかりと行うことが大切です。 なお、その喜びには、ほめられる喜び、自分の力でできた喜び、得意になった喜び、自分が成長し大きくなった喜びなど、様々です。喜びの違いへの気付きもまた、深い学びとなります。
小・中学年	自分でやろうと決めた目標に向かって、強い意志をもち、粘り強くやり抜くこと。	(低学年の内容) + 「もっとよくなりたい」 中学年は「自分でやろうと決めた目標」です。最後まで続けるか、それとも途中で諦めてしまうかは、自分次第です。しかし、<u>やろうと決めたのには、訳があるはず</u>です。「今よりよくなりたい」「強い自分になりたい」「みんなの役に立ちたい」などです。諦めてしまうと、これらのことができなくなってしまうし、頑張ったことも無駄になってしまいます。 逆に、目標を達成することで、<u>自信が生まれ、さらにもっとよくなり</u>たいという心が育ってくるのです。また、頑張るコツなどについても考えられるようにしましょう。
小・高学年	より高い目標を立て、希望と勇気をもち、困難があってもくじけずに努力して物事をやり抜くこと。	(低、中学年の内容) + 「目標に向かって確かな一歩」 目標の実現のためには、自分が目指す目標と、その目標に至る一つ一つのステップの両方が大切です。どこに向かって進もうとしているのか、何をを目指すのかをしっかりと見据えていないと、迷子になってしまいます。 一方、足もともしっかりと見ていないと、目標に近付くことすらできなくなってしまいます。 より高い目標があるからこそ頑張ろうという気持ちが高まり、<u>小さなステップを一步步つ進むからこそ、小さな喜びが希望となり、自信や勇気となって次の一歩を後押ししてくれる</u>のです。 目標に向かっての確かな一歩が、目標を実現する大きな一歩なのです。努力とは、この一歩一歩を確かに進んでいくことです。
中学校	より高い目標を設定し、その達成を目指し、希望と勇気をもち、困難や失敗を乗り越えて着実にやり遂げること。	(小学校の内容) + 「自分の弱さに打ち克つ」 中学生になると、理想通りにいかない現実が見えるようになってきます。そして、困難や失敗の経験も増えてきます。そうすると、<u>日々の生活がマイナス思考になってしまいがち</u>です。 その中で、困難や失敗を乗り越えて最後までやり遂げるには、意志を強くもって自分の弱さに打ち克つことと、目標に向かって計画的に小さなステップを歩んでいくことが大切です。 自分の心の中にある不安や自信のなさ、怠け心、計画性のなさなどの弱さを冷静に見つめ、困難や失敗をバネに、小さな目標であってもそれが達成されたときの満足感や希望、勇気に気付き、<u>自分の弱さを克服していく、すなわち、克己が中学校のポイント</u>です。

学年	「学習指導要領」の内容	発達の段階ごとのキーワードとポイント
小・低学年		
小・中学年		(小・低学年、中学年は項目なし)
小・高学年	真理を大切にし、物事を探究しようとする心をもつこと。	「分からないことをそのままにしない」 先人が物事の真理を明らかにしたきっかけは、小さな好奇心であったり、ちょっとした疑問であったりすることが多くあります。疑問に思ったことや分からないことをそのままにせず、自分が納得するまで分かろうとすることが、大きな業績を残すことにつながることに気付き、<u>自分の中にある好奇心や疑問のもつ値打ちを大切に</u>できるようにしましょう。
中学校	真実を大切にし、真理を探究して新しいものを生み出そうと努めること。	(小学校の内容) + 「真理の探究が人生を豊かに」 新たなものは、これまでの固定的な見方や考え方に囚われず、自由な発想の中で創造されるものです。広い視野に立ち、<u>多面的・多角的な見方や、論理的・批判的に考える姿勢が、新たな見方や考え方の発見や創造につながり、自分の喜びや成長、人生の豊かさにつながる</u>ことに気付くことができるようにしましょう。

B
 小
 親切, 思いやり
 /
 中
 思いやり, 感謝

学年	「学習指導要領」の内容	発達の段階ごとのキーワードとポイント
小・低学年	身近にいる人に温かい心で接し、親切にすること。	「温かさ」「相手のこと」 低学年の子どもたちは、親切にすることが大切であることは知っています。なぜなら、小さい頃から、「年下の子や高齢者、困っている人には親切にしようね」と言われ続けているからです。でも、その「大切さ」の中身は、「言われたから」「ほめられるから」が中心です。そのような子どもに、「親切って大切なのだ」という考え方の中身を広げていきましょう。 低学年ですから、結果に着目します。親切にすると、ほめられるだけでなく、相手がとてもにこにこ笑顔になります。周りの人たちもにこにこします。そして、親切にした自分も嬉しくなるのです。つまり、親切は、自分や相手、周りの人たちの心を温かくする素敵なことなのだということから、親切の大切さを広げていけるようにします。
小・中学年	相手のことを思いやり、進んで親切にすること。	(低学年の内容) + 「相手の気持ち」 中学年は、相手の気持ちを深く考えられるようになってくると言われています。したがって、中学年では「温かさ」に加えて、相手の気持ちを考え、「自分だったらこうしてほしい」と思うことを相手にすることが思いやりだと自覚できるようにします。 低学年は結果であったのに対して、中学年は「相手の気持ちを考えたら、自分は……」と、「動機」に注目して「親切、思いやり」の意味や大切さを考えられるようにします。
小・高学年	誰に対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にすること。	(低, 中学年の内容) + 「相手の立場」 相手の気持ちを考えるだけでは、高学年の「親切、思いやり」には不十分なのです。相手の置かれている立場や状況までも考え、どうすることが本当に相手のためになるのかを考えて行うのが思いやりであるということを自覚できるようにしたいです。 さらに、「誰に対しても」は、様々な人に対象を広げるというより、「様々な相手に応じて」つまり、その人にとってどうすることが大切なのかという方向で考えられるようにします。
中学校	(思いやり, 感謝) 思いやりの心をもって人と接するとともに、家族などの支えや多くの人々の善意により日々の生活や現在の自分があることに感謝し、進んでそれに応え、人間愛の精神を深めること。	(小学校の内容) + 「さりげなさ」 中学校の段階では、人間としての弱さと崇高さから思いやりについて考えられるようにします。 ポイントは、「さりげなさ」です。思いやりとは、心から相手のためのことを思い行う行為であるが故に、「自分がしてあげた」などといった自分中心の考えではなく、「さりげなさ」が大切です。しかし、私たちはつい、「してあげている」と、自分のことが大事になってしまうのです。この人間的な弱さと同時に、相手のことをとことん大切にしようとする思いやりをもった人間の崇高さが、私たちの心の中には同居していることを自覚できるようにしましょう。それが人間愛です。そして、相手に気付かせない、負担をかけない、さりげない思いやりの難しさとその素晴らしさを、みんなで考え合えるようにしたいものです。

B
 小
 感謝
 /
 中
 思いやり, 感謝

学年	「学習指導要領」の内容	発達の段階ごとのキーワードとポイント
小・低学年	家族など日頃世話になっている人々に感謝すること。	「ありがとうがいっぱい」 低学年は、具体的な思考をする段階です。したがって、感謝の対象も、身近にいてお世話になっている人たちです。 しかし、自分中心の低学年の子どもたちは、お世話になっていることは当たり前のことと考え、感謝の気持ちを抱きにくい状況があります。 合い言葉は、「ありがとうを見つけよう!」。「ありがとう」を伝えたい人たちやお世話になっていることをたくさん見つけられるようにしましょう。また、してくれたことだけではなく、その奥にある思いも考えることができるようにしましょう。
小・中学年	家族など生活を支えてくれている人々や現在の生活を築いてくれた高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接すること。	(低学年の内容) + 「ここまで私たちのことを」 中学年の感謝の対象は、目の前の人に限らず、自分たちの生活を支えてくれている人たちへの感謝です。それは、出会ったことのない人たちもいれば、高齢者のように、かつて支えてくださっていた人たちなど、子どもたちにとっては「遠く」の人たちです。つまり、対象の範囲が広がります。 さらに、「尊敬」という内容も加わります。この尊敬は、単に、すごいというだけでなく、遠くの見ず知らずの私たちのことを大事に考えようとしてくれていることに対する尊敬であり、心からの感謝につながるものです。
小・高学年	日々の生活が家族や過去からの多くの人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それに応えること。	(低, 中学年の内容) + 「つながりに守られて」 高学年の感謝の対象は、さらに見えにくいものとなります。それは、支え合いや助け合いという、人と人のつながりによって私たちは支えられ、助けられていることに対する感謝です。 これは、直接、見たり、お礼を言ったりすることはできません。だから、しっかりと意識しないといけないし、感謝の心を表すために、自分もまた支え合いや助け合いのつながりの中に入り、自分にできることをすることによって、困っている人を支えたり、助けたりしていくことが、感謝に応えることになるのです。
中学校	(思いやり, 感謝) 思いやりの心をもって人と接するとともに、家族などの支えや多くの人々の善意により日々の生活や現在の自分があることに感謝し、進んでそれに応え、人間愛の精神を深めること。	(小学校の内容) + 「見ようとしないう自分の弱さ」 感謝の心は、進んで心掛けて見ようとしないと気付けないものです。なぜなら、私たちは自分中心に、狭く物事を捉えてしまうからです。このことは、つい、「自分がしてあげている」と自分を主張してしまいがちな「思いやり」の心と同じく、人間的な弱さから出ているものです。したがって、中学校は、「思いやり」と「感謝」は一つの内容項目として扱われています。 当たり前と思い、見ようとしないう自分の弱さに気づき、相手の思いやりの深さに感謝するとともに、自分のできることで応えていこうとする気持ちを高めていくことができるようにしましょう。 なお、感謝の対象も、個人に対するものから、社会や人と人とのつながり、さらには自然の恵みへの感謝などへも広げましょう。

学年	「学習指導要領」の内容	発達の段階ごとのキーワードとポイント
小・低学年	気持ちのよい挨拶、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接すること。	「あいさつパワー」 結果や具体的なことに注目しやすい低学年です。「あいさつパワー」「にこにこパワー」などを使って、あいさつや気持ちのよいふるまいのもつよさを、考えさせましょう。 あいさつや気持ちのよいふるまいには、「一緒に頑張ろう」「明日も頑張ろう」「とても心強いな」などと、相手にも自分にも、周りの人たちにも、大きな力を与えてくれるパワーがあるのです。 展開の後段も、「あいさつパワーやにこにこパワーを見たことがありますか」と尋ね、 <u>自分たちの生活の中にある礼儀の大切さ</u> を自覚できるようにしましょう。
小・中学年	礼儀の大切さを知り、誰に対しても真心をもって接すること。	(低学年の内容) + 「心を届ける」 礼儀は、相手に対して心を届けることができます。心と心のキャッチボールなのです。 単に、「誰に対してもあいさつをしましょう」と押さえるのではなく、 <u>自分の気持ちを相手に届けていることや、相手の気持ちが自分に届いていることを自覚できるように</u> しましょう。 相手の気持ちを深く理解できるようになる中学年ならではのポイントです。
小・高学年	時と場をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接すること。	(低、中学年の内容) + 「心と形」 高学年の「親切、思いやり」は、「 <u>どうすることが本当に相手のためになるのかを考えた親切の大切さ</u> 」です。そのような、相手の状況や立場が理解できる高学年だからこそ、 <u>どうすることが相手のためになるのか、あるいは状況に応じた礼儀とは何か</u> といったことを考えることの大切さを取り上げましょう。 <u>相手のことを思うが故に、それをどう表すのが大切</u> なのです。 <u>心と形の両方が伴ってこそ、相手を尊重し、真心のこもった礼儀となることを</u> 自覚できるようにしましょう。
中学校	礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとること。	(小学校の内容) + 「ＴＰＯと自分の心」 中学生は、これまで習慣化してきた礼儀の形を無意識のうちにやっている一方で、素直に礼儀の心を表すことに恥ずかしさや照れを感じてしまうことも多くあります。中学校の「思いやり」のポイントは、「さりげなさ」です。「礼儀」においても、さりげない立ちふるまいの中に、相手を尊重する思いが感じられるかどうかが大切になります。ＴＰＯを考え、心のこもった礼儀は、自然と、相手や周りの人の心を和らげ、心にそっと届きます。 そうなってくると、礼儀は自分自身の問題でもあります。「自分」がムクムクと邪魔をしてくる中で、「相手」を心から大切にしようとするさりげない礼儀を、自分から表すことができるかどうかは、その人の値打ちに関わってくるのです。 「自分は、相手のことを大切に思い、ＴＰＯを考えているかどうか」というように、自分を一步下がって俯瞰しながら、礼儀について考えられるようにしましょう。

学年	「学習指導要領」の内容	発達の段階ごとのキーワードとポイント
小・低学年	友達と仲よくし、助け合うこと。	「仲よしいっていいな」 まだまだ自己中心性が残る子どもたちです。相手の気持ちを深く考えたり、察したりすることは難しい段階です。その一方で、友達と楽しく遊んだ経験や、喧嘩をしてつまらなかった経験は、たくさんあります。 結果に目がいきやすい子どもたちですから、そのよさを大切にし、 <u>けんかするより仲よくしたほうがずっと楽しいし、一人でできないこともできるようになる</u> といったよさに注目させましょう。
小・中学年	友達と互いに理解し、信頼し、助け合うこと。	(低学年の内容) + 「双方向の信頼」 子どもたちにとって友達は、「自分が何かをしてもらうため」と一方的に求める存在です。このため、自分に必要がなかったり、自分に都合が悪かったりすると、「友達じゃない」と考えがちです。 友達との関係は双方向であり、相手が自分の気持ちを大切にしてくれるのは、自分が相手の気持ちをどれだけ大切にしているか、相手が信頼してくれるのは、自分がどれだけ相手を信頼しているか次第なのです。
小・高学年	友達と互いに信頼し、学び合って友情を深め、異性についても理解しながら、人間関係を築いていくこと。	(低、中学年の内容) + 「磨き合い、高め合い」 高学年になると、相手の気持ちだけでなく、相手の立場をも考えることができるようになります。つまり、 <u>どうすることが相手のためになるのかが考えられる学年</u> ということです。 そこで、高学年では、「本当に相手のためになることは何か」という視点で友情を考え、単なる仲よしではなく、磨き合い、高め合える関係を築いていくことの大切さを考え合いましょう。 異性についても、信頼のもと、互いを理解し合い、よさを認め、磨き合い、高め合いながら友情を深めていこうとする態度を育てていくことが大切です。
中学校	友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合うとともに、異性についての理解を深め、悩みや葛藤も経験しながら人間関係を深めていくこと。	(小学校の内容) + 「互いのプライドの尊重」 中学生の時代は、生涯にわたる親友との出会いの多い時期です。その一方で、周りから見られる自分を気にする時期でもあります。 <u>真の友情は、互いに、相手を一人の人間として、とことん信頼し、尊重し合える関係においてできあがるものであることを、みんなで考え合いましょう。</u> 「一人の人間として」とは、相手のことを自分のことのように考えるだけでは足りません。相手は、自分にない素晴らしいものをもった存在であり、お互いがどのように相手から学び合い、高め合うことができるかと考えられることです。 ただし、自分が傷付くことを恐れ、距離を取ったり、感情の行き違いがあったりと、悩みや葛藤も表れます。これらを共に乗り越えたとき、真の友情が生まれます。それは、互いのプライドを尊重し合える、生涯にわたる友情です。 なお、異性についても、互いに相手のよさを認め理解し合い、相手の成長と幸せを願って励まし合い、高め合える関係を築いていくことが大切であることを自覚できるようにしましょう。

学年	「学習指導要領」の内容	発達の段階ごとのキーワードとポイント
小・低学年		(小・低学年は項目なし)
小・中学年	自分の考えや意見を相手に伝えるときにも、相手のことを理解し、自分と異なる意見も大切にすること。	「自分と相手は違う考え」 相手の気持ちを深く考えられるようになってくる中学年です。自分の考えだけしかないと思ってしまうがちだけれど、 <u>相手は自分とは違った考え方をすることや、相手の考えをしっかりと聞くことで自分と違った考えを知ることができ、とても楽しくなり、自分の世界も広がる</u> ことなどを自覚できるようにしましょう。
小・高学年	自分の考えや意見を相手に伝えるときにも、謙虚な心を持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を尊重すること。	(中学年の内容) + 「違いは豊かさ」 意見や考えの違いを、私たちはマイナスに捉え、自分の意見を守ろうとします。しかし、相手は、自分にはない見方や考え方をもっています。意見が対立する場合などは、特にそうです。そこで、 <u>相手の考え方や意見、立場を広い心で謙虚に受け止めることで、自分の見方や考え方はより豊かなものとなるのです。</u> 相手の考え方や意見、立場のもつ値打ちや意義は、自分にとってとても有意義なものであるとして大切に考える 「違いは豊かさ」 という見方や考え方を自覚できるようにしましょう。
中学校	自分の考えや意見を相手に伝えるときにも、それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解し、寛容の心をもって謙虚に他に学び、自らを高めていくこと。	(小学校の内容) + 「頑なな自分と開く自分」 中学校の段階になると、相手の意見や考え、個性や立場を理解することの大切さは十分理解しているようです。しかし、自分の意見や考えを守ろうとするあまり、相手を理解することを頑なに避けたり、逆に、攻撃してしまったりする心の弱さをもち合わせています。最大の防御は攻撃であるとは、よく言ったものです。 「寛容」とは、心が広く、ゆとりがあることです。まさに、 <u>相手の意見や考えを受け入れられないときは、自分に心の余裕がないときです。</u> さらに、「謙虚」とは、飾らず控えめであることです。確かに、私たちには、見栄を張り、自分をよく見せようと飾ってしまう弱さがあります。 「相互理解、寛容」は、相手に迎合することではありません。自他共に尊重しながら、 <u>人それぞれによさがあることとお互いに心の弱さをもっていることを、心にゆとりをもって客観的に捉え、自分を開くことで自らを高めていくことができる</u> ことを自覚できるようにしましょう。自分を俯瞰できる中学生だからできることです。

①教師の姿から学び、教師の想定を超える子どもたち

ある中学校2年生の〈A 真理の探究〉の授業でのことです。

授業の導入で、担任の教師が、「真理を明らかにすることは、どうして大切なんでしょう」と、授業のめあてを提示しました。

その後、生徒の積極的な発言のやりとりがあった中で、一人の女子生徒が「真理を明らかにすることは大変だが、好きだからできるんだ。そして、苦しい中で真理を探究することは、人を成長させるんだ」と発言し、続いて、このようなことを言いました。

「先生もそうでしょ？ 今日もたくさんの先生方が来られた中で授業をするのはしんどいと思う。でも、これができるのは、先生は、教師という仕事が好きだからだ。そして、この研究授業を乗り切ったら、先生は成長しているはずだ。」

すると、それを聞いていた男子生徒が続けました。

「赤ちゃんも一緒だ。赤ちゃんは好奇心の固まりで、色々なものを口に入れるのが好きだから。そして、どんどん成長している。」

教師の想定を、軽々と超えた授業です。このような授業に出会えるからこそ、特に中学校の授業は面白いのです。

子どもたちは、日々、様々な経験をして心を育てています。その中で、人との関わりは大きく、その関わりの中に、私たち教職員がいることは間違いありません。

②なぜ一つの内容項目か、なぜ学級の問題を扱わないのか

「現実の問題は色々な内容項目に関わるのに、なぜ道徳科は一時間に一つの内容項目しか扱わないのか」「なぜ、学級の中で起こっている問題や、学級の子どもが書いた作文を使って授業をしないのか」と尋ねられることがよくあります。

確かに、子どもたちがこれから先に出会う問題は、複数の内容項目が絡み合うものばかりです。しかし、だからこそ道徳科は、一つの内容項目で進めるのです。その理由は、道徳科の特質にあります。

道徳性は、「日常生活や今後出会うであろう様々な場面や状況において、道徳的行為を主体的に選択し、実践することができる内面的資質」です。つまり、現実のどのような場面や状況に出会うかは分からないのです。そのとき、子どもたちには、自分の道徳性を総動員して深く考え、適切に判断して行動してほしいわけです。当然、様々な内容項目が関わります。それらを、より深く、より広く考え、判断できるようにするために、道徳科で内容項目一つ一つについて深く考えられるようにしておくことが大切なのです。もし、道徳科で複数の内容項目を安易に扱ったら、浅い学びしかできないでしょう。

一方、学級の中で起こっている問題は、特定の場面や状況です。そして何より、具体的な解決策を話し合うことになります。これは、学級活動として、しっかりと話し合い、解決を図ることが大切です。

道徳科で養う道徳性は、これから先、どのような状況や場面においても、自分の頭の中で多面的・多角的に考えを巡らし、主体的に判断できるような内面的資質なのです。

学年	「学習指導要領」の内容	発達の段階ごとのキーワードとポイント
小・低学年	約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切にすること。	「みんながよい気持ち，みんながいやな気持ち」 結果や具体的なことに注目しがちの低学年は，きまりを守ったり，守れなかったりした後のことに注目させましょう。 その際，「みんな」という視点を大事にしましょう。みんなには，自分も相手も，そして，その物や場所を使う多くの人も含まれています。きまりを守ることで， <u>そのみんながよい気持ちになるのです</u> 。 さらに，みんなが気持ちよく過ごせるというだけでなく，みんなが優しい集団や社会になるといった視点も大切にしましょう。
小・中学年	約束や社会のきまりの意義を理解し，それらを守ること。	(低学年の内容) + 「みんな同じ思いや願いがあるから」 約束や社会のきまりの意義，公共のものや場の大切さは，「守るとよい気持ちになる」という結果の視点だけでなく，「みんな同じ思いや願いがあり，それらを誰もがかなえられるようにするためにあるのだ」という視点で考えましょう。 この視点は，低学年に見られがちな「結果」に注目したものでなく， <u>中学年から表れてくる「動機や過程」に注目した考え方</u> です。
小・高学年	法やきまりの意義を理解した上で進んでそれらを守り，自他の権利を大切にし，義務を果たすこと。	(低，中学年の内容) + 「権利があるから義務がある」 中学年では「きまり」であったものが，高学年では「法やきまり」と，法の考え方に発展していきます。 集団の中の成員は，一人ひとりが権利をもっています。その権利をみんなで守っていくために，成員一人ひとりに義務があります。それは， <u>よりよい社会に生きる権利と，よりよい社会をつくる義務</u> です。 このことを理解することで，法やきまりは，守らなければ罰せられるという他律的な考え方ではなく， <u>みんなが住みやすいよりよい社会をみんなで作るという公德の考え方</u> や，自律的な法やきまりの守り方の自覚につながります。
中学校	法やきまりの意義を理解し，それらを進んで守るとともに，そのよりよい在り方について考え，自他の権利を大切にし，義務を果たして，規律ある安定した社会の実現に努めること。	(小学校の内容) + 「法やきまりは自分たちが作ったもの」 私たちは，法やきまりを「私たちを拘束する，冷たく融通の利かないもの」として捉えがちです。しかし，そもそも， <u>法やきまりは，みんなでよりよい集団や社会をつくろうという思いのもと，みんなが知恵を絞って考え，作ったもの</u> なのです。つまり，法やきまりを，すでにあるものと捉えるのではなく， <u>立法者や社会の形成者としての視点で捉える</u> ということです。 実際，中学生が校則の改正に取り組む事例がありますが，このとき，不思議なことに，中学生は，教師が考えるよりも厳しく校則を定めます。この校則をみんなで守ることによって，自分たちの中学校を，みんなが楽しく通える日本一の中学校にしようという思いがあるからです。ところが，年月が経つと，校則は自分たちを縛るためのものだといった捉えになってしまうのです。 特に，中学校2，3年生あたりで，法やきまりに対して，立法者の視点がもてるようになってくると言われています。中学校の指導のポイントは，ここにあります。

学年	「学習指導要領」の内容	発達の段階ごとのキーワードとポイント
小・低学年	自分の好き嫌いとらわれないで接すること。	「仲間はずれがないと，みんな楽しい」 自分の好き嫌いとらわれて接すると，仲間はずれや一人ぼっちになる人が出ます。そうすると，その人もいやな気持ちになります。逆には， <u>仲間はずれや一人ぼっちの人がいなくなると，その人はもちろん，みんなが楽しく，よい気持ちになるのです</u> 。したがって，自分の好き嫌いとらわれないで接することはとても大事なことです。
小・中学年	誰に対しても分け隔てをせず，公正，公平な態度で接すること。	(低学年の内容) + 「みんな，仲間」 ギャングエイジと呼ばれる中学年は，自分たちの好みで気の合う仲間をつくり，排他的になってしまうことがあります。「分け隔てをしない」ということには， <u>自分たちだけでなく，他の友達もみんな，同じ一つの集団の中にいるのだという自覚</u> が大切です。 その上で，誰かが仲間はずれにされたり，つらい思いをしたりしていたら，それは，自分たち集団の問題であり，同じ集団にいる自分たちが取り組み，解決していく問題であるという自覚を深めていきましょう。
小・高学年	誰に対しても差別をすることや偏見をもつことなく，公正，公平な態度で接し，正義の実現に努めること。	(低，中学年の内容) + 「仲間の問題は，自分たちの問題」 高学年になると，いわゆる「社会律」と言われる段階の子どもたちが多くなります。周りからの視線が気になり，友達からどのように見られているかで判断したり，同調圧力を強く感じたりする時期です。このため，集団の問題に気付いていても，多数派に同調したり，他人事と傍観したりしてしまいがちです。 この考え方が偏見や差別を生み出していること，このことがいじめの問題につながっていくことなどを自覚し， <u>「自分たち」の集団や社会の中で起こっている問題として考え，よりよい集団や社会正義の実現に向けて，自らが積極的に関わっていかうとする意欲や態度を育てて</u> いきましょう。
中学校	正義と公正さを重んじ，誰に対しても公平に接し，差別や偏見のない社会の実現に努めること。	(小学校の内容) + 「閉じた正義と開かれた正義」 自分たちの仲間だけを優遇し，自分たち以外の者や集団に対して閉鎖的，排他的になったり，自分と異なる感じ方や考え方，少数の立場にいる者や自分よりも弱い存在に優越感を抱き，差別心や偏見をもったりしてしまうのは， <u>自分たちの集団を閉鎖的・排他的にして，自分たちを守ろうとする弱い考え方</u> です。「閉じた正義」とも言えるでしょう。 一方，よりよい集団や社会の実現に向けて，公平な手続きのもと， <u>自分が積極的に行動を起こすことは「開かれた正義」</u> です。集団や社会の問題は，その成員が解決していかなければなりません。正義の実現は，差別や偏見，いじめの直接的な当事者だけでなく，その集団や社会の成員すべてにかかっています。 積極的な行動とは，直接的な行動だけでなく，まさに成員同士が力を合わせ，様々なアプローチで関わっていく「開かれた正義」なのです。

学年	「学習指導要領」の内容	発達の段階ごとのキーワードとポイント
小・低学年	働くことのよさを 知り，みんなのために 働くこと。	「働くことの喜び」 子どもたちが働くことと言えば，学級の当番や係の活動，家庭での自分の仕事などがあります。それらの仕事を進める中で，みんなの役に立つことの喜びややりがい，自分の成長などを感じられるようにすることが大切です。 ただし，低学年ですから，集団という意識ではなく， <u>集団の中にいる「人々」の役に立ったという視点から，働くことの喜びを感じることができるようにしましょう。</u> 喜んでくれた，助かると言ってくれた，自分も頑張ったといった喜びです。
小・中学年	働くことの大切さを 知り，進んでみんな のために働くこと。	(低学年の内容) + 「みんなの役に」 いわゆるギャングエイジを迎える中学年の段階になると，「自分たちの学級」などと，集団についての意識が高まり，集団で活動する意欲や機会がどんどん増えていきます。 そこで，働くことは自分の喜びや利益だけでなく，自分たちの学級の生活や自分の家族の生活がさらに楽しくするなど， <u>働くことは集団の役に立つことを自覚できるようにしましょう。</u> まだ中学年ですから，社会ではなく，身近な集団です。
小・高学年	働くことや社会に 奉仕することの充実 感を味わうとともに， その意義を理解し，公 共のために役に立つ ことをすること。	(低，中学年の内容) + 「社会の役に」 児童会や地域の子ども組織の中心となる高学年では，集団の範囲をさらに広げ， <u>働くことが社会の役に立っていることを自覚できるようにしましょう。</u> 「感謝」の内容のポイントが，高学年では「つながり」に対する感謝であるように，働くことにおいても， <u>社会のつながりの中で一人ひとりが一員として存在し，社会を支える役に立っていることを自覚できるようにしましょう。</u>
中学校	(勤労) 勤労の尊さや意義 を理解し，将来の生き 方について考えを深 め，勤労を通じて社会 に貢献すること。	(小学校の内容) + 「自分が社会の力にという喜びと誇り」 働くことは，個人の幸福の追求とともに，社会への貢献という大きな役割があり，そのことが，働くことの喜びや誇りにつながることを自覚できるようにしましょう。 まず，個人にとっては，収入や自分の夢の実現や成長などがあります。さらに，多くの人の役に立ったり，笑顔をつくったりしたというやりがいや充実感をもつことができます。 一方，社会にとっては，その成員それぞれが自分の役割や仕事を果たすことで共同体が成り立ち，さらに発展することができます。この社会の発展に自分が積極的に貢献したのです。このことが，働くことの誇りとなるのです。 <u>つまり，個人の喜びと誰かの役に立つこと，社会に貢献することが，それぞれ単独で存在するのではなく，一体となってその人の誇りとなっているのです。</u> <u>これが，「社会的自己実現」であり，そのような充実した生き方を追求し実現していきたいという意欲を高めることが，将来の生き方についての考えを深めることになるのです。</u>

学年	「学習指導要領」の内容	発達の段階ごとのキーワードとポイント
小・低学年		
小・中学年		(小学校は「C 勤労，公共の精神」に含まれる)
小・高学年		
中学校	社会参画の意識と 社会連帯の自覚を高 め，公共の精神をもっ てよりよい社会の実 現に努めること。	(小学校の内容) + 「集団や社会の主人公」 集団や社会は，その成員によって，よりよいものへとつくられていきます。自分自身も，その成員の一人であるということです。 <u>誰かがしてくれるだろうと他人任せにしている自分を振り返り，自分たち一人ひとりが，自分が属する集団や社会において，それを維持，発展させていく主人公であることを自覚できるようにしましょう。</u>

学年	「学習指導要領」の内容	発達の段階ごとのキーワードとポイント
小・低学年	父母，祖父母を敬愛し，進んで家の手伝いなどをして，家族の役に立つこと。	「家族の役に立つ喜び」 自分に対する家族の愛情を，ぬくもりやうれしさ，喜びから自覚できるようにしましょう。特に，多くが他律の段階にいる子どもたちです。大好きな家族が自分を大事にしてくれていることや，家族のおかげで自分の毎日の生活があること，父母，祖父母は，たくさん のことを知っていて，また，家族のために働いていることなどに注目させ，自覚を深めます。 そして，その感謝や憧れなどから，自分にできることをお手伝いとして行い，大好きな家族のために少しでも役に立とうとする思いや，してもらった喜びだけでなく，自分が家族の役に立った喜びから，家族を敬愛する思いを高めましょう。
小・中学年	父母，祖父母を敬愛し，家族みんなで協力し合って楽しい家庭をつくること。	(低学年の内容) + 「家族の一人として」 家族の庇護のもとから次第に家族の外へと生活や関心を広げる子どもたちです。これまでは，あまりに近かったために気付かなかった家族の自分に対する思いに気付き，家族のために自分にできることをしようとする態度を育てていきたいと考えます。 「つくる」とありますが，中学校のように家庭生活を「築く」というものではなく，家族の一人として家族のために自分にできることをすることで，家族みんなが楽しい，うれしい雰囲気をつくっていくことができる」といったことを自覚できるようにしましょう。
小・高学年	父母，祖父母を敬愛し，家族の幸せを求めて，進んで役に立つことをすること。	(低，中学年の内容) + 「家族それぞれの立場から思いを考えて」 高学年では，家族の幸せを求めて進んで行動することがポイントです。「家族の幸せを求める」とは，家族それぞれに思いや願いがあることに気付き，それを考えて行動することです。低学年や中学年のように，子どもである自分に対する家族の思いや願いだけではなく，家族自身の思っていることや願っていることです。 したがって，例えば，「父母は，仕事と家庭の両立のために，苦勞をしながらも頑張っていて，仕事がうまくいくこと，家族が笑顔でいることが，喜びなのだ。だから，私は……」などと，家族それぞれの立場に立って家族の思いや願いを考え，自分にできることを行動しようとする思いを深めましょう。 それは，家族の一員として，受け身ではなく，家族のことを考え，行動しようとする能動的な考え方への広がりです。
中学校	父母，祖父母を敬愛し，家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築くこと。	(小学校の内容) + 「家庭生活を築く主体として」 小学校では，あくまでも，家族の中でお世話になっている自分でした。その中で，家族の気持ちや立場に立って考え，家族の一員としての自分にできることを広げてきました。 中学校は，「家庭生活を築く」とあるように，いよいよ家族の一員として主体的に家庭生活を築いていく段階です。それには，家族全体のことや家族それぞれの思いや願いを考え，自分も家族の一員として家族を支え，積極的に家庭という生活の場を築いていこうとする意欲や態度を育てることが求められます。祖父母から見れば，バトンタッチの時期なのです。

学年	「学習指導要領」の内容	発達の段階ごとのキーワードとポイント
小・低学年	先生を敬愛し，学校の人々に親しんで，学級や学校の生活を楽しくすること。	「学校は楽しい」 低学年は，学級や学校に対しては，まだ，自分と担任の先生との一対一という関係が優勢で，集団という意識は十分ではありません。そこで，まずは担任の先生に尊敬と親しみの気持ちをもつことと，学校には担任の先生だけでなく，教職員や友達，上級生など，様々な人々がいることやその人たちと接することの楽しさや喜びに気付き，憧れや親しみをもって自分たちの学校という意識を高めることができるようにすることが大切です。
小・中学年	先生や学校の人々を敬愛し，みんなで協力し合って楽しい学級や学校をつくること。	(低学年の内容) + 「自分たちの学級」 低学年との違いは，敬愛の対象が学校の人々にも及んでいることと，学級や学校生活を「楽しくする」ことが，「つくる」となっていることです。 活動範囲の広がりとともに，学級の話合い活動や係活動などで学級生活の充実をみんなで進めてきた経験を基に， <u>学校 みんなが学校をよりよくしようと支えていることや，自分たちも，学級をよりよくしようと頑張っていることの自覚が図れるように進めましょう</u> 。そして特に，「自分たちの学級」という意識やそのよさに注目できるようにしましょう。
小・高学年	先生や学校の人々を敬愛し，みんなで協力し合ってよりよい学級や学校をつくるとともに，様々な集団の中での自分の役割を自覚して集団生活の充実に努めること。	(低，中学年の内容) + 「自分たちの集団や学校らしさ」 高学年の子どもたちは，学校や地域の集団においては，集団を支える機会が増え，自分たちの学校や集団という意識がますます高まります。また，高めることが大切です。 そして，自分の置かれている立場や役割を意識しながら，自分たちの学校や集団をよりよく発展させることは， <u>成員一人ひとりの力を合わせ，チームとして取り組んでいくことによって達成できることなどを自覚し，活躍できるようにしていくことが求められます</u> 。 高学年として学校や集団をリードした経験を基に，自覚を深めていきましょう。
中学校	教師や学校の人々を敬愛し，学級や学校の一員としての自覚をもち，協力し合ってよりよい校風をつくるとともに，様々な集団の意義や集団の中での自分の役割と責任を自覚して集団生活の充実に努めること。	(小学校の内容) + 「校風や集団の誇りをつくる」 中学生ともなれば，様々な集団に属しています。その集団には色々な形，目的や意義があります。その一員であることに愛着をもち，その集団をさらによりよい集団にしていこうとする役割と責任は自分にもあることを意識できるようにしましょう。 集団の中の役割には，目立つものもあれば陰となるものもあります。それらの役割に軽重を付けることは，役割しか見ていない狭い捉えです。一つ一つの役割があるからこそ，集団としての共通の目的や目標に向かい，様々な役割をもった成員が力を合わせることでできます。そして，それぞれの責任を果たして協働するとき，成員間には信頼関係が築かれ，集団としての大きな成果が得られます。それはやがて，その集団や成員の誇りとなるのです。 集団と個の両方を捉える視点が大切です。

学年	「学習指導要領」の内容	発達の段階ごとのキーワードとポイント
小・低学年	我が国や郷土の文化と生活に親しみ、愛着をもつこと。	「私たちの自慢」 低学年の子どもたちにとって、郷土やふるさとといった意識はまだなく、私たちの町や住んでいるところ、家の近くの場所や建物といったものでしょう。そこから、自慢できるところを探すことで、親しみや愛着をもつことができますようにします。 そのとき、その町や場所、建物などをきれいにしたり、大切にしたりしてくれている人々の様子や努力に気付かせましょう。 さらに、昔遊びや季節行事などの我が国の文化や自然についても取り上げ、それらに対して「面白いな」「楽しいな」「みんなが大好きなんだ、自慢したいな」などの自覚がもてるようにしましょう。
小・中学年	我が国や郷土の伝統と文化を大切にし、国や郷土を愛する心をもつこと。	(低学年の内容) + 「自分たちの地域」 活動的になる学年です。地域の行事やお祭りなどに出掛ける機会が増え、自分から行きたいと思って参加することも多くなるでしょう。親しみや愛着から一歩進め、 <u>地域や我が国の伝統や文化を大切にしてきた人々の思いを</u> 考えたり、進んで活動に参加しようとする <u>思いを高めたり</u> していきましょう。
小・高学年	我が国や郷土の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、国や郷土を愛する心をもつこと。	(低、中学年の内容) + 「伝統や文化にある先人の思い」 高学年になると、我が国の国土や産業、歴史などの学習が進みます。自分たちの地域や郷土に限らず、広く我が国に受け継がれている伝統や文化について直接、あるいは教科等の学習を通じて触れる機会もあります。そこで、それらを育んできた先人などの思いや生き方について考え、 <u>伝統や文化を尊重するとともに、自分たちも、受け継ぎ発展させていく存在であることの自覚を</u> 深めるようにしましょう。 特に、先人などの強い思いを支えているものは、先人の努力によって受け継がれた <u>自分たちの地域や郷土、我が国への愛着や絆、発展への願いであつたり、次代につないでいきたいという情熱や郷土の一員としての使命感</u> であつたりするのでしょう。
中学校	(郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度) 郷土の伝統と文化を大切にし、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬の念を深め、地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、進んで郷土の発展に努めること。	(小学校の内容) + 「地域社会の形成者」 小学校の段階にはない「 <u>地域社会の一員としての自覚</u> 」や「 <u>発展に努める</u> 」という文言の追加は、 <u>中学生にはすでに地域社会の担い手・形成者としての期待がある</u> ということでしょう。 自分が住む郷土や地域を見渡したとき、当たり前になっているものの中に、多くの先人や地域の人たちの <u>たゆまぬ努力や思いによって築かれ、受け継がれてきたもの</u> がいかに多いか驚くことがあります。 このことに自覚し、敬うとともに、単にものや場所で留まるのではなく、そこに隠れていて普段は気付かない先人や地域の人たちの <u>思いを改めて考え、次は自分たちの番としてバトンが回ってきていることを自覚し、自分たちも引き継いでいこうとする意欲を高めていくことが大切</u> です。

学年	「学習指導要領」の内容	発達の段階ごとのキーワードとポイント
小・低学年		
小・中学年		(小学校は「C 伝統と文化の尊重, 国や郷土を愛する態度」に含まれる)
小・高学年		
中学校	優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献するとともに、日本人としての自覚をもって国を愛し、国家及び社会の形成者として、その発展に努めること。	(小学校の内容) + 「我が国の形成者」 我が国の伝統や文化への親しみや愛着を深め、その素晴らしさやよさを知ることや、それらを支えてきた人々の思いや願いに思いをはせること、他の国や地域の伝統や文化のよさにも注目することが、 <u>伝統の継承と新しい文化の創造、国を愛する態度につながります。</u> <u>我が国の文化や社会を、よりよいものに形づくっていく担い手は自分たちであり、そのためには日本のことをしっかりと学ぶことも大切である</u> といった自覚がもてるようにしましょう。

学年	「学習指導要領」の内容	発達の段階ごとのキーワードとポイント
小・低学年	他国の人々や文化に親しむこと。	「他国と接する楽しさや親しみ」 低学年の子どもたちにとって、自国と他国の文化の違いを明確に区別することは難しいでしょう。そこで、他国の人々と交流したり文化に触れたりしたことを思い出したり話し合ったりすることを通して、 <u>他国と接する楽しさや親しみ</u> を感じることができるようになることが、国際理解のスタートになるものと考えます。
小・中学年	他国の人々や文化に親しみ、関心をもつこと。	(低学年の内容) + 「文化の違い」 中学年になると、外国語活動などで、自分たちの身の回りにある他国の文化や特徴に気づき、自分たちからも積極的に接していこうとする意欲も高まってきます。そこで、他国の人々や文化に、さらに親しみをもつことができるようにしながら、 <u>自分たちの国の文化と他国の文化との共通点や相違点、それぞれのよさ</u> を感じることができるようにならしましょう。 そして、自分たちがそうであるように、 <u>他国の人々もそれぞれの文化を大事にして生活していることや、自分たちの国と他国にはつながりや関わりがたくさんあることなどに気付く</u> ことができるようにならしましょう。
小・高学年	他国の人々や文化について理解し、日本人としての自覚をもって国際親善に努めること。	(低, 中学年の内容) + 「国際親善は自分から」 高学年になると、社会科や外国語科、総合的な学習の時間などでの学習経験も増え、他国への関心や理解が一層高まります。また、他国の人々と接する機会も増えることから、自分たちの文化との違いも認識できるようになります。 そこで、国際理解を深め、国際親善に努めようとする態度を育てていきましょう。他国の人々もまた、それぞれの国の伝統と文化に愛着や誇りをもって生きていることや、自分たちも日本人として我が国の伝統と文化を理解し、誇りをもって接することが大切であることを自覚できるようにならしましょう。 そして、 <u>自分たちにできることを考え、進んで他国の人々と接していくことが、ものの感じ方や考え方、生活習慣、文化の違う他国の人々との国際親善につながる</u> ことなどに気付くことができるようにならしましょう。
中学校	世界の中の日本人としての自覚をもち、他国を尊重し、国際的視野に立って、世界の平和と人類の発展に寄与すること。	(小学校の内容) + 「同じ人間として自分にできること」 中学生にもなると、世界の話題や国際問題についての知識も増え、関心も高くなってきます。また、音楽やダンス、スポーツなどの分野で、他国の人々や文化についての理解も深まり、同時に、日本人としての意識をもって関わるようになってきます。 そこで、世界の平和と人類の発展に寄与した先人たちの生き方なども参考に、国と国という一対一の関係だけでなく、地球家族や同じ人間同士という高い視野から、 <u>国際貢献を支えているのは、国際的な視野に立つことや同じ人間として尊重し合う態度、思いやりや相互理解、寛容、社会正義などの心であることや、自分も世界の平和や人類の発展に大いに貢献できる可能性がある</u> ことを自覚できるようにならしましょう。

学年	「学習指導要領」の内容	発達の段階ごとのキーワードとポイント
小・低学年	生きることのすばらしさを知り、生命を大切にすること。	「生きているから」 低学年では、「いのち」「生きている」といったことに対して、実感をもって自覚できるようにすることがポイントです。 例えば、元気よく遊んだり勉強したりできることや、ご飯をおいしく食べられること、体には温もりがあることなどは、 <u>生きているからこそ、できることや感じられること</u> です。このことに気づき、「いのち」の大切さや「生きていること」の素晴らしさを自覚できるようにならしましょう。
小・中学年	生命の尊さを知り、生命あるものを大切にすること。	(低学年の内容) + 「一つしかない命、支えられている命」 中学年は、生命の大切さについて考え始める段階です。特に、生命の有限性や連続性は、子どもたちにとって分かりやすいものです。 <u>死について理解できるようになる段階</u> とも言われていますから、 <u>一つしかない命、多くの人に支えられている命、祖父母、父母、自分と受け継がれてきた命</u> といった視点で、生命の大切さについて考えさせましょう。 また、自分たちだけでなく、すべての生命あるものについて広げて考えられるようにすることも大切です。
小・高学年	生命が多くの生命のつながりの中にあるかけがえのないものであることを理解し、生命を尊重すること。	(低, 中学年の内容) + 「つながりの中にある重さ」 教科化に当たって「つながりの中にある」という文言が追加されています。このことは、 <u>たった一つの生命であっても、それは決して小さな存在ではなく、多くの人々や生命あるものとの支え合いやつながりの中で存在する、とてつもなく大きくて重くて、かけがえのないものである</u> ということなのです。 このことを自覚することが、生命に対する畏敬の念となり、人間の力をはるかに超えた、生命の重さや尊さを自覚することになるのです。そして、自分が精一杯生きることが、その生命を大切にすることになるのです。これらのことを自覚できるようにならしましょう。
中学校	生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること。	(小学校の内容) + 「広く、深いつながり」 中学校では、小学校段階で考えてきた「つながり」が、さらにもっと広く、深くなります。それが、 <u>社会的・文化的生命</u> です。それは、自分の役割や居場所をもって生きることや、 <u>人間としての尊厳や誇りをもって生きる</u> ことです。生物学的・身体的生命に限ることなく、人と人や社会とのつながりの中で生きていることや生かされていることに感謝の念をもつとともに、これらの生命を軽く見るのではなく、進んで自他の生命を尊重しようとする態度を育てていきましょう。 なお、このように生命についての考え方や捉え方を広げ、深めながら、現代的な課題である「生命倫理」の問題についても考える機会を設けることも大切なことです。

◎の視点
◎の視点

学年	「学習指導要領」の内容	発達の段階ごとのキーワードとポイント
小・低学年	身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接すること。	「動植物と仲よし」 低学年の子どもたちにとって、動植物は、共に生きる仲間です。動植物の世話をしたり、身近な自然の中で遊んだりすることによって、「不思議だな」「すごいな」「生きているんだな」「かわいいな」といった気持ちが高まり、動植物を自分のことのように考えたり、親しみをもって接しようとしたりする思いが育っていきます。 これまでの経験も振り返りながら、共に生きている仲間として、動植物や自然を捉えることができるようにしましょう。
小・中学年	自然のすばらしさや不思議さを感じ取り、自然や動植物を大切にすること。	(低学年の内容) + 「自然のもつ力」 自然に親しみ、大切にしてきた経験を振り返りながら、 <u>自然のもつ美しさや素晴らしさ、不思議さを自覚するとともに、「自然も生きているんだ」のように自然のもつ力を自覚できるようにしましょう。</u> 特に、私たちは動植物の気持ちを自分のことのように考えることがあります。また、自然の中では心が安まります。 自然と私たちは仲間であることや昔から共に生きてきたこと、さらには、自然は私たちを大きく包み込んでくれることなどを自覚できるようにしましょう。このことが、自然に対する畏敬の念や環境保全への意識につながります。
小・高学年	自然の偉大さを知り、自然環境を大切にすること。	(低、中学年の内容) + 「自然と共に生きる」 私たち人間は、自然に囲まれながら、自然と共に生きてきました。具体的には、私たちは自然から大きな力をもらって生きています。さらに、私たちは、自然を守り、育ててきました。 このように私たちは、自然がもつとてつもない力に助けられるとともに謙虚に生きてきました。まずは、このような自然と人間との関わりの様々な側面を自覚することが大切です。 その上で、 <u>自然環境を大切にするために、その課題や自分たちにできることを考え、積極的に関わっていくことの大切さを自覚できるようにしましょう。</u>
中学校	自然の崇高さを知り、自然環境を大切にすることの意義を理解し、進んで自然の愛護に努めること。	(小学校の内容) + 「自然に生かされている人間」 「自然を大切にすること」「自然を愛護すること」は、中学生であれば当然知っています。ただし、その自覚を、人間と自然とのつながり、さらには、自分と自然とのつながりで考えられるようにすることが大切です。 そのためには、まず、自然のもつ美しさや神秘さ、さらには、悠久の流れや恐ろしさといった、私たち人間の力をはるかに超えた自然の崇高さに対して畏れ敬い、謙虚であることが求められます。何より、私たち人間は、この大自然の中では、とてもちっぽけで無力な存在であり、自然によって生かされ、育まれてきた存在であるという自覚をもって、自然と向き合うことが大切です。 このような大きな視点で捉えながら、人間が自然と共生していくために、自分たちができることを考え、実行していくことが、未来へとバトンを渡していくことになることを自覚できるようにしましょう。

学年	「学習指導要領」の内容	発達の段階ごとのキーワードとポイント
小・低学年	美しいものに触れ、すがすがしい心をもつこと。	「目の前に広がる美しさやすごさ」 低学年の子どもたちは、具体的世界に生きています。したがって、子どもたちが一番感動するのは、自然の美しさでしょう。一面に広がるお花畑や赤や黄色に織りなす紅葉などです。 これらに素直に感動することはとても素晴らしいことであること、それは、単に「きれいだな」というだけでなく、 <u>爽快さを感じ、気持ちが洗われ、背筋が伸びるような「すがすがしさ」という感動があることをみんなで共感し合うことが、スタートです。</u> そして、さらに心地よい音楽や芸術作品、これまでの自分の経験などと、感性が揺さぶられるものへと、どんどんと対象を広げながら、感動する心はとても素敵であることを確かめ合ひましょう。
小・中学年	美しいものや気高いものに感動する心をもつこと。	(低学年の内容) + 「心で感じる美しさやすごさ」 中学年になると、対象は、直接目の前に広がるものだけではなく、人の心をはじめ、心で感じる美しさへと広がります。そして、すがすがしさをさらに発展させ、 <u>対象の内に秘められた純粋さや大きさ、気高さへと広げましょう。</u> 特に、「気高さ」ですから、「すごいな」という感動を、今の自分では及ばない、しかし、そうありたいと憧れるといった尊敬の心を含めたものへと深めていきましょう。このあたりから、 <u>感動を基に自分を見つめ直すような視点が入ってくるのです。</u>
小・高学年	美しいものや気高いものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつこと。	(低、中学年の内容) + 「人間の力を超えたものの美しさやすごさ」 高学年は、人間の力を超えたものへと、さらに発展します。人間のもつ心の崇高さや偉大さ、真理を求める姿や自分の可能性に無心で挑戦する人間の姿、芸術作品の内に秘められた人間の業を超えるもの、大自然の摂理やそれを包み込む大いなるものなどです。 これらに対して、 <u>人間の力を超えていることへの感動や、人間のもつ力のちっぽけさの自覚などを進め、自分や自分たち人間との関係にも注目できるようにしましょう。</u>
中学校	美しいものや気高いものに感動する心をもち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めること。	(小学校の内容) + 「感動は人を成長させる」 中学生です。感動する心と言っても、その対象や感じ方、考え方には、想像を超える広さや深さがあることを考え合ひましょう。そして、人間の力を超えたものに対して畏敬の念をもつことの意義として、なかなか素直に感動できないという、人間のもつ弱さについても触れながら、 <u>素直に感動する心は、自分のおごりや独り善がりを避け、私たち人間に謙虚さをもたらし、一回り大きな成長を促し、人生を豊かにしてくれることも自覚させましょう。</u> つまり、色々なものに感動できる人は、自分を成長させ、人生を豊かに生きることができるのです。

学年	「学習指導要領」の内容	発達の段階ごとのキーワードとポイント
小・低学年		
小・中学年		(小・低学年，中学年は項目なし)
小・高学年	よりよく生きようとする人間の強さや気高さを理解し，人間として生きる喜びを感じることを。	「自分の中にある弱さとそれを乗り越える強さ」 高学年では，まず，自分の中には，「弱さ」とそれを乗り越える「強さ」があることを自覚できるようにしましょう。特に，「弱さ」は誰もがもっていることを押さえた上で，同時に，「叱られるから」ではない，弱さを克服しようとする「強さ」「気高さ」があることをみんなで共感しながら自覚できるようにしましょう。
中学校	人間には自らの弱さや醜さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを理解し，人間として生きることの喜びを見いだすこと。	(小学校の内容) + 「弱さを強さに」 小学校では，「弱さ」「強さ」とそれぞれを大きく捉えていましたが，「弱さ」は， <u>自信のなさや逃げたいという心，ずるさ，見栄，人間の心の醜さ</u> といったものです。一方，「強さ」「気高さ」とは， <u>自分の良心や誇り，プライド</u> といったものです。そして，弱さと強さは表裏一体であり，弱さと向き合うことで強く生きていく喜びが生まれるのです。これらのことの自覚を深めましょう。